

事務所訪問

税理士業界の匠

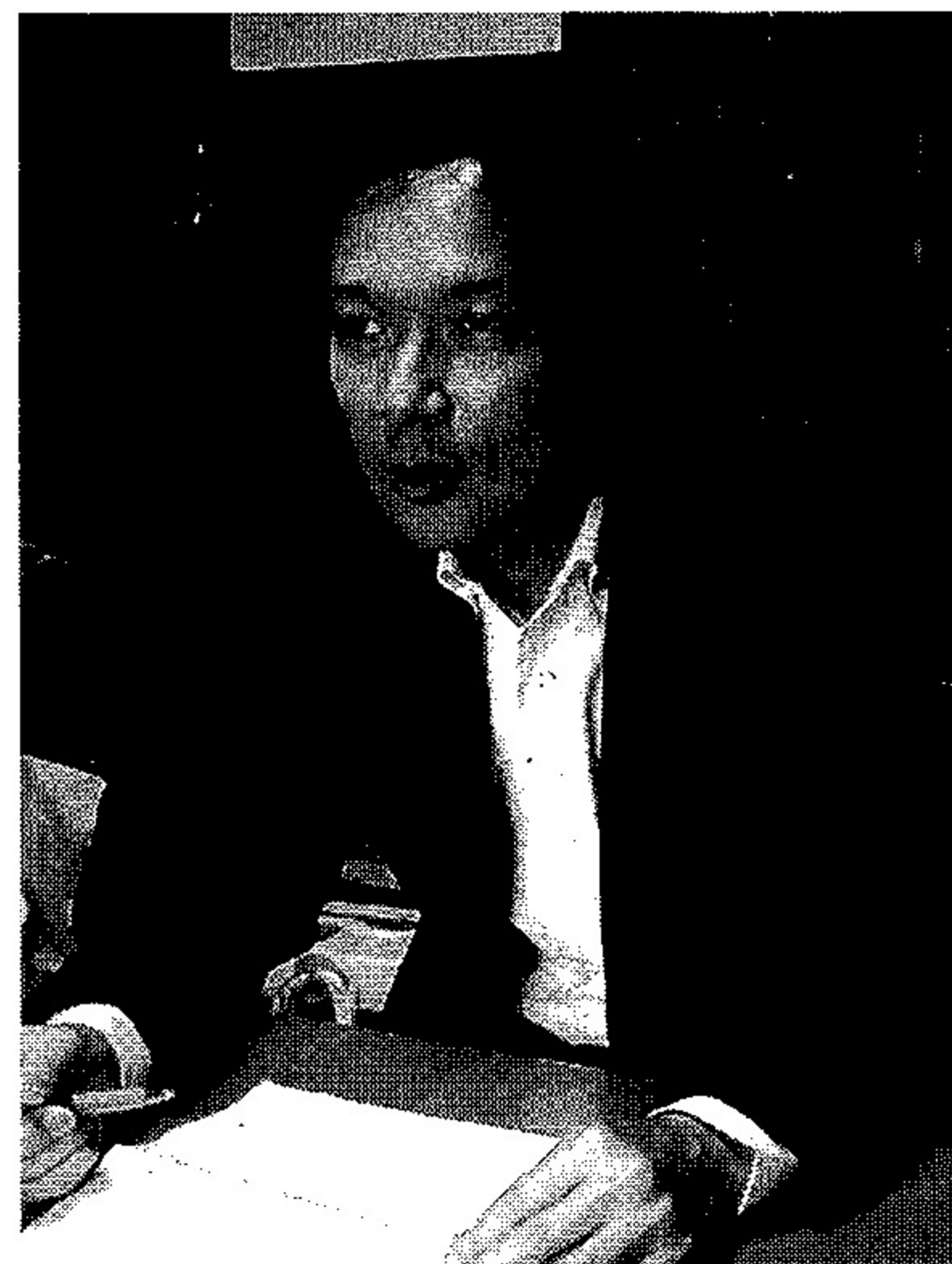
田口修税理士事務所

所長 田口修 税理士

<事務所概要>

所在地 埼玉・さいたま市
 税理士登録 平成12年5月
 事務所開設 平成18年1月

生まれ育った埼玉・さいたま市に事務所を開業した田口修税理士。「どんな依頼が来ても対応できる体制を、常に整えている」と語るように、顧問先は建設会社から金融業者、個人事業者まで幅広い。資産関係のスポット業務にも積極的でオールラウンド型の「万能、税理士として活躍中だ。



税理士となるまでのキャリアは一風変わっている。平成元年、慶應義塾大学経済学部を卒業した後、公務員の共済組合職員を経て、埼玉県に入庁。同県の幹部候補としてスタートを切った。県庁時代には福祉・土木分野など県行政の根幹を支える重要な仕事に従事した。

そんな田口氏が税理士を志すきっかけとなったのは、組織の予算や決算といった財政・会計部門に携わるうちに仕事上、必要性を感じて勉強した簿記だった。簿記を深く学びたいと、仕事の後に専門の学校へ通ったが、欲が出てきた。「どうせなら簿記だけじゃなく税務、税理士の勉強してみるか」。そして同11年、税理士試験に合格。翌12年には税理士登録し、都内の税理士事務所、税理士法人で実務経験を積んだ。

「現在、注力している業務は？」という質問に田口氏は「月次決算です」ときっぱり。M&A、経営コンサル、会計参与など、最近の税理士が注目している仕事がたくさんあるなか、シンプルに月次決算を挙げた。

「税理士業界は不景気や独立の困難さとか、全体として厳しいです。そのせいか、経営コンサルとか、IT化といった本来の業務以外……といえれば語弊がありますが、目新しい事柄への関心が高まっています。しかし、本当に大事なことはそうではない。最も重要なのは毎月の月次決算です。これを積み重ねて最終的に一年の決算で税務申告書を作成する。これが税理士業務の土台です」。

確かに、多くの事務所では業務の便宜上、確定申告前にまとめて決算している状況もある。しかし、記帳代行の専門会社などによって税理士業務が浸食されつつある昨今、「記帳代行だけでは食っていけない」と考える事務所も多い。そのうえでコンサルやそのほかの周辺業務への興味なのだが、田口氏は「それは本末転倒だ」と指摘する。

「税理士は税務の専門家であって、経営コンサルなんて毎月の月次決算で消費税も減価償却もきちんと処理して、それで初めてできる話。顧問先にも月々の決算を経営に生かすようアドバイスすべきです」。記帳

代行会社にはまねできない高いレベルでの税務サービスを提供する——これが税理士最大の武器だという。

「もちろん、これからの税理士は付加価値を付けて、事務所の差別化を図っていく必要性はあります。ただし、IT化も本格的に導入すれば、顧問先にとってもそれなりに資本投入が必要で、費用対効果という点も考えて、たとえば、伝票は紙ではなくペーパーレスで、エクセルでもなんでもいいので電子的なやりとりをする。会計ソフトの知識がない顧問先には簡単に使えるソフトの紹介、そういうことから進めていきます」。

県庁マンから会計人の道へ

契約書が必要な時代

独立開業から4年弱の田口氏。現在の開業税理士が一番苦労するのは新規開拓だ。「厳しい時代ですから、設立間もない会社にとって顧問料が負担になるケースもあります。そのため、設立から最初の1年については通常の顧問料からは割引するプランを設定しています。現実には経営が軌道に乗るまではある程度、料金的な相談には応じるようにしています」。

また田口氏の人的なネットワーク作りには、母校である慶應大のOB会、不動産三田会が一役買っているようだ。これは不動産業界の第一線で活躍している同大OBの集まりで、会員には建設会社、不動産会社の経営者、ゼネコン、大手住宅メーカーの社員ら、さらには士業としては司法書士、税理士、不動産鑑定士らがいる。このつながりから顧客を紹介されることもしばしば。会合は月1回だ。

新規開拓に力を入れる半面、悩みもある。最近「顧問料のダンピング競争」といえるような過当な報酬の引下げ合戦に巻き込まれる税理士も少なくない。「時世でしょうが、なかなか税理士業務を理解してくれない人もいます」。前述の通り、田口氏は新規会社に対して「経営が大変だろうから……」と善意で特別料金を設定している。しかし、それを「当たり前だ」と勘違いする顧問先もある。

長年付き合うパートナーになりたい、そんな考えがあつてこそその料金設定だが、正規料金に変更したとたん、契約解除というケースもあつたという。「ある意味、採算度外視でお客さんの要望に対応できる体制を整えるのですが、これからは顧問契約書を交わす必要性も感じます」。税理士業界には経済情勢だけでなく「顧客のモラル」といった世相も大きく影を落している。

「業界も大変だと言われますが、それほど暗くはない。税金は常に必要なものですから」。あくまで前向きだ。休日にもつばらテニスで汗を流す。「僕も今年で43歳。体を動かさないと、なまってしまう」と快活に笑う。